

# 読書メモ2018年4月号

—永六輔著『職人』（岩波書店・1996年）ほか—

やなぎさわかつひろ  
柳沢克央 編

（信州・上田仮説サークル）

2018年4月28日（土），4月例会用レポート

## ◇はじめに—「転勤しました」

前回までの「読書メモ」と同様，サークルで発表することを目的とすると，読書がはかどるので，今回もこのメモを作成しました。自身のため，記録を残すことが第一目的です。みなさま，よろしく（適当に）おつきあい下さい。今までのものと同様に説明あり，引用あり，要約あり，感想ありで諸々が混交しておりますのでご注意を。（私物）と書き添えてあるもの以外はすべて篠ノ井高校および屋代高校図書室蔵書。

この春，篠ノ井高校の図書室とお別れをしました。深い感謝を込めて綴ります。

新年度に入り，屋代高校の図書室にも馴染みつつあります。理系の図書が特に充実しているという印象です。さっそくロバート・フックの『ミクログラフィア図版集』（仮説社・1985年）をリクエストして買ってもらいました。授業時間の中で生徒たちに紹介し，素晴らしい反響が得られています。「ほんもの」の素晴らしさ・迫力は，特に詳しく説明しなくても，ちゃんと伝わるものだと思います。

## ◇3月号で読んだ本

- ◎森重湧太著『一生使える見やすい資料のデザイン入門』（インプレス・2016年）
- ◎ちくま評伝シリーズ〈ポルトレ〉『武満徹（作曲家）』（筑摩書房・2016年）
- ◎山本義隆著『近代日本百五十年』（岩波新書・2018年）
- ◎ハリー・ウォン／ローズマリー・ウォン共著『世界最高の学級経営』（東洋館出版社・2017年）
- ◎佐々木基編著『高校教師これだけはやっておきたい黄金の三日間』（明治図書・2010年）（私物）
- ◎赤坂真二編著・片桐史裕著『学級を最高のチームにする！365日の集団づくり』（明治図書・2017年）（私物）

◎『世界の大思想 6・ベーコン（ノヴム・オルガヌム他）』（河出書房・1966年）

◎『世界の名著 22・デカルト（方法序説他）』（中央公論社・1967年）

◎『世界の大思想 7・デカルト（方法序説他）』（河出書房・1965年）

◇特別企画…「廃棄本」からひとつかみ

◎◇加藤八千代著『朝永振一郎博士・人とことば』（共立出版・1984年）

◎◇大矢行著『アニメ&コミックのための絵コンテ作法』（代々木アニメーション学院・出版局 1994年・この本だけはラベルがないので進路指導室の放出品と思われる）

◎◇立花隆著『宇宙からの帰還』（中央公論社・1983年）

◎◇保阪正康著『自伝の書き方』（新潮選書・1988年）

◎◇佐川芳枝著『寿司屋のかみさんおいしい話』（講談社・1996年）

◎◇植田康夫著『編集者になるには』（べりかん社・1994年）（進路指導室放出版）

◎◇ロード・モーラン著『チャーチル―生存の戦い―』（河出ワールドブック・1967年）

◎◇加藤尚武著『ジョーク哲学史』（河出書房新社・1983年）

◎◇吉田秀和著『レコードのモーツァルト』（中央公論社・1975年）

◎◇岩城宏之著『棒ふりの休日』（文藝春秋・1979年）

◎◇宇野功芳著『僕の選んだベートーヴェンの名盤』（音楽之友社・1982年）

◎◇西岡まさ子著『緒方洪庵の息子たち』（河出書房新社・1992年）

◎三木雄信（たけのぶ）著『A4一枚勉強法』（PHPビジネス新書・2018年）（私物）

◎矢部宏治著『知ってはいけない』（講談社現代新書・2017年）

◎藤原和博著『10年後、君に仕事はあるのか?』（ダイヤモンド社・2017年）

◎加藤一二三著『挑みつづける人生』（日本実業出版社・2017年）

◇今回、読んだ本

◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・1』（黎明編）（朝日ソノラマコミックス・1997年）

深い意味を感じた言葉を引用。（以下同様）

○…虫たちは自然がきめた一生のあいだ…ちゃんとそだち食べ恋をし卵を産んで満足して死んでいくのよ。人間は虫よりも魚よりも犬や猫や猿よりも長生きだわ。その一生の間に…生きているよろこびをみつけられればそれが幸福じゃないの？（149ペ）

○赤アりがんばれーっ。でかいやつに負けるなっ。絶対に勝てよーっ。（287ペ）

○「だれだ？おれを呼ぶのは？もう死ぬんだ」

『生きるのよ！！』

「火の鳥？おまえが！？おまえがおれに話してるのか？」

『そうよ。あなたは死んじゃあだめ。生きるの。どんなことがあっても生きのびるの！！』

「なぜ？なぜおれが生きなければならないの？」

『あなたに生きる権利があるからよ』

「権利？権利とはなんだ？」

『あなたはいま生きているのだもの。だから、生きつづけることができるのよ！！』(335  
ぺ)

### ◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・2』（未来編）（朝日ソノラマコミックス・1997年）

○「活動している星はみんな〈生きて〉いるのです。宇宙生命（コスモゾーン）とはそういうものです」

「宇宙生命もあなたがたのように病気になります。そして、ひからびて死んでいくのです…ほんとうならずと、ずっと長く生きられるのに……」

「そして…地球も病気になったのです。かかりはじめは一千年ほどまえでした。…この病気の兆候はすぐ地球の上にあらわれてきました」（中略）（51 ペ）

○「ゴランナサイ」

『あの光は？』

「女タチガ敵トタタカッテ自爆シタ光デス…ホラ、マタ…」

《ピカッ パーッ ピカッ》

シーン

「……」

『……』

「ドームに接近しつつあった敵は全滅せるもよう。なお、現場に可動物体のけはいはなく、ロボットたちも一体のこらず破壊したと思われる 情報おわり」

「彼女タチハ心カラハカセヲ愛シテイマシタ…」

『……わかっておる！』(76 ペ)

◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・2』（未来編）（朝日ソノラマコミックス・1997年）

◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・3』（ヤマト編・宇宙編）（朝日ソノラマコミックス・1997年）

「お若いの、死なないことが幸せではないぞ。生きているうちに生きがいを見つけることが大事なんじゃ」

◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・4』（鳳凰編）（朝日ソノラマコミックス・1997年）

生きる？死ぬ？それがなんだというんだ。

宇宙のなかに人生などいっさい無だ！ちっぽけなごみなのだ！

なぜおれは鳴くのだろう。なぜこんなに天地は美しいのだろう

そうだ。ここではなにもかも……生きているからだ！（354 ペ）

◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・5』（復活編）（朝日ソノラマコミックス・1997年）

◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・6』（望郷編）（朝日ソノラマコミックス・1997年）

◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・7』（乱世編・上）（朝日ソノラマコミックス・1997年）

◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・8』（乱世編・下／羽衣編）（朝日ソノラマコミックス・1998年）

◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・9』（異形編・生命編）（朝日ソノラマコミックス・1998年）

◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・10』（太陽編・上）（朝日ソノラマコミックス・1998年）

◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・11』（太陽編・下）（朝日ソノラマコミックス・1998年）

◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・別巻』（ギリシャ・ローマ編）（朝日ソノラマコミックス・1998年）

篠ノ井の地では消化吸収しきれずに返却。『火の鳥』をひとことで言うと「輪廻転生」。これは古代インド由来であり、現在も脈々と引き継がれている日本人の死生観の特徴といえる…とまとめられる…かなあ？

◎宮崎駿作『風の谷のナウシカ』（第1巻～第7巻）（徳間書店・1997年）

大作。正月休みに取り組むも途中でストップ。気力・体力がある時に再挑戦する。

◎チャップリン著『チャップリン自伝／上（若き日々）・下（栄光と波瀾の日々）』（新潮文庫・2017年）

この本はゴースト・ライターによるものではなく、本人が口述筆記の手を借りて仕上

げたものであることが「あとがき」からわかる。諸般の事情により、篠ノ井高校ではおつき合いできなかつたが、新しい学校でまた、お目にかかりたいと思っている。感謝。

◎**小林秀雄・岡潔共著『人間の建設』（新潮文庫・2010年）**

両巨頭の高尚な雑談記録。密度の濃い対話の呼吸に深く感心した。読みやすいが、本当に理解するには手間がかかりそう。それでも、薄いのですぐに全体に目を通すことは可能である。スルメのような本。

具体的には、次の機会を待って紹介したい。あとがきは茂木健一郎氏。

◎**バロン吉元作『マンガ日本の古典・徒然草』（中央公論社・1996年）**

兼好法師作の『徒然草』全段を作者が大胆に解釈して作画。辞書的にも使える。篠高図書館に入っているものを借りて、気に入ったのでアマゾンで購入した。家にあるのでとても安心。

転勤のため、学校に置いてあった図書館のものを返した。

◎**後藤秀機著『天才と異才の日本科学史』（ミネルヴァ書房・2013年）**

表紙をめくってすぐのところに次の一文が記されており、これが限りないほどの重みを持つ。

東洋になきものは、有形において数理学と、無形において独立心と、この二点である。

—福沢諭吉

付箋まで貼ったが、タイムアップ。脚気の歴史、森鷗外に関する記述に特に鋭い部分があった。また仕切り直しで会う予定。

追記：屋代高校図書室にリクエストして現在購入を勧めてもらっている。続きを読むことができる日も近い。

◎**川合康三著『生と死の言葉』（岩波新書・2017年）**

表見返しのキャッチフレーズをそのまま引用。

一人間は古来、生とは何か、死とは何か、常に考え、悩んできた。自分の老い、その先の死、さらに身近な人たちの死、それにどのように向き合ったらよいのか。孔子、荘子、曹操、陶淵明などの先哲、文人は何を思ったのか、彼らがのこしたことばから探っていく。六十を超える名言を収める。また仕切り直しで会う予定。

◎日本写真家協会編『SNS時代の写真ルールとマナー』（朝日新書・2016年）

内容はそのままタイトルのとおり。上田仮説サークルのサイト管理にすぐに役立つ内容が満載。ただし、今回は時間切れ。また仕切り直しで会うことにする。

◎永六輔著『職人』（岩波新書・1996年）（私物）

- 「オレは何かするときには必ず自分の体の調子を聞くよ」（5 ペ）
- 「教えるということは教わることです」
- 「わたし、下手な人には教えません。下手な人に教えると、自分まで下手になってしまうものです」
- 「上手は下手の見本なり、下手は上手の見本なり」
- 「苦労なんて耐えるもんじゃない。苦労は楽しむものです」（7 ペ）
- 「職業に貴賤はないと思うけど、生き方には貴賤がありますねエ」
- 「人間、〈出世したか〉〈しないか〉ではありません。〈いやしいか〉〈いやしくないか〉ですね」
- 「いいかい、仕事は金脈じゃない、人脈だぞ。人脈の中から金脈を探せよ。金脈の中から人脈を探すなよ」
- 「もらった金と稼いだ金は、はっきりと分けとかないといけないよ。なんだかわからない金は、もらっちゃいけねえんだ」（9 ペ）
- 「コラッ！あんまり勉強すると、バカになっちゃうぞ」
- 「食べて美味しいものは簡単につくれます。喰って旨いものとなると年季がかかります」（板前の台詞）（13 ペ）
- 「板前ですから言葉がおかしいかもしれないけれど、魚を仮死状態にして、死後硬直が始まる直前に、喰っている餌が良いと、その餌の味も滲み出てくるんです。海老の活きたのを喰ってる鯛と、養殖の生簀のなかで餌を喰ってる鯛が、まるで違うのはそこです」（15 ペ）
- 「よく質の悪い紙のことをワラ半紙というでしょう。とんでもありません。ワラの繊維で漉いた紙が高級な画仙紙なんです。ワラ半紙というのは、いちばんいい紙なんです」
- 「カンナをひきますわね。そのカンナ屑が板より長くなると、ちょっと腕がよくなったというか…」（21 ペ）
- 「彫り三年。研ぎ四年。女房貸しても砥石は貸すなって教えられました」

- 「はなやぐ。くつろぐ。やすらぐ。これだすなァ，お着物のよろしいところは」(22 ペ)
- 「着物を着ることなら誰でもできます。着物を着こなすのは，誰でもというわけにはいきませんね」
- 「いくつのときから機をおってますかといわれてもねエ。思い出しても，思い出しても，機を織っているのよねエ」(23 ペ)
- 「職人の仕事なんていうものは進歩はない。進歩しちゃいけない。道具でも何でも，昔からのものを使ってんのが，いちばんいい仕事ができます」(25 ペ)
- 「近頃の若い連中だって，きちんと説明してやれば，けっこう仕事はこなしてくれます。やあ，見事なものだと思ふときもあります。〈好きなようにやってみな〉というと，何にもできないのが不思議です」(35 ペ) (柳沢注：これは「自由と束縛の矛盾論」そのものだ)
- 「徒弟制度の世界はモノもつくってきたけど，ヒトもつくってきたんだ」(38 ペ)
- 「掃除がきちんとできない奴は，ロクなもんじゃありません。ものをつくる人間は，まず掃除から修行すべきです」
- 「お前さん，そこに座りなさい。お前さんは働きの来ているんじゃない。修行にきているってことを忘れちゃいけないかい？」(40 ペ)
- 「池子の森を伐って，米軍住宅にしているでしょう。あそこは神の森ですよ。神の森をアメリカが…。それを黙っているような右翼は右翼じゃありません」
- 「田舎の人は木に詳しいから伐り倒す。都会の人は木を知らないけど守りたがる」(45 ペ)
- 「出版物でも，テレビタレントでも，素人がもてはやされる。その素人がもてはやされているジャンルに人気が集まるみたいですね。玄人でなきやっというジャンルは何でもダメになってしまう。そう思いませんか？」(53 ペ)
- 「褒められたい，認められたい，そう思い始めたら，仕事がどこか嘘になります」
- 「職人が愛されるっていうんならいいですよ。でも，職人が尊敬されるようになっちゃァ，オシマイですね」(60 ペ)
- 「私ァ，名もない職人です。売るために品物をこしらえたことはありません。えエ，こしらえたものがあるがたいことに売れるんでさァ」(63 ペ)
- 「木造の家が一軒建って，三十人からの職人に仕事がまわります。伊勢の遷宮だって，二十年ごとに職人の仕事の伝承が行われる。そこが一番，重要なんです」(70 ペ)

○「曲尺、いけねえって言うんだな。よーし、そんなら言ってやる。いいか！警察のこの机、何尺何寸、あの柱は何尺何寸。警察手帳出してみろ、何寸何分。全部、尺と寸でできているんだぞ。それをなんで警察がいけねえって言うんだ。曲尺がいけねえって言うんなら、オレは曲尺は使わねえ。使わないけれども、オレの目ん玉の中にはガキの頃から刻みこんできた曲尺の目盛りが入っているんだ。オレは物差しを使わなくたって、みれば何尺何寸とわかるんだ。オレの目玉の中には、曲尺の目盛りが刻み込んである。目玉もってくか、この野郎。もってけッ」

シェークスピアの書きそうなセリフですよ（笑）。それを聞いて僕は、これはおかしいや、このおじさんがこれだけ怒っているというのは、おじさんのほうが正しいにちがいないと思いました。（162 ペ）

○さて、殿様や行政による技術の伝承でなくても、きちんと伝えているものに、伊勢の遷宮があります。

どうして、二十年ごとに建て直しをするのか。

神道の理由は別にして、あれはギリギリの技術の伝承なんですね。二十年ごとに建て直すということは、宮大工の仕事、職人の腕が伝わっていくことにつながるんです。それがいちばん重要なことです。

つまり、二十歳の時に下ごしらえしたやつが、その次は四十歳で、バリバリの棟梁です。そのつぎは六十歳の大棟梁。

西岡常一さんのような方ですね。腕組んで「違うッ」なんて言ってるだけでいい。

二十年の間隔ならば、職人の腕は伝わっていくんですって。これが三十年だと伝わらなくなっちゃう。

だから、職人技術の伝承ということに関しては、お伊勢さんもどれだけ役に立っているか。木工職人だけじゃないんですよ。神主さんの装束から、お皿から何から全部替えるんですから。何百人という職人の仕事を伝えているわけです。

職人からみると、あの神社の存在は、日本の神道がどうのこうのということとは全然違う立派な意味合いがあるんですね。

日本家屋だって、屋根瓦だろうが、左官だろうが、何だろうが、みんな仕事がつながっていくんです。

だから、どこかで日本建築でつくっている家があったら、いいなと思うだけではなくて、ありがたいな、これで何人かの職人の仕事が伝わっていくんだな、と思ってください。（174 ペ）



柳沢：かっこいいな～。全部にはとても賛同できないけれども、生き方は大切にしたいな～と思った。

◎永六輔著『大往生』（岩波新書・1994年）（私物）

面白いと思った部分を引用して紹介する。

○「健康を追求するあまり、不健康になっちゃうでしょう。安全を追求するあまり、危険が増えるのと同じですね」（58 ペ）

○「どうして外側から診るのが内科で、内側を診るのが外科なんですか」（60 ペ）

○「近代医学は二百年、東洋医学は二千年。どっちを信用すればいいか、ヨーク考えた方がいいよ」（61 ペ）

○三波春夫さんと宗教について話したことがある。その中で…

「お客様は神様ですと言ってた頃のお客様が、老人でしたからね。あの神様は、皆さん、仏様になりました」

そうなのだ。この国では神様も仏様になるのだ。（81 ペ）

○「何か言い残すことはありませんか？」と聞かれて、自分で「ご臨終です」と言って死んだ人もいた。（88 ペ）

○水の江滝子さんの生前葬のとき、永六輔氏が編集した音楽、読経の構成リスト。

1. 「三重念仏」
2. 浄土真宗「正信偈」
3. ジャワ・ガムラン・ミサ
4. 天台宗「声明」
5. ギボンズ「主よ私の信念を増したまえ」
6. イスラム教「コーラン」
7. 日蓮宗「題目」
8. ロシア宗教歌
9. 曹洞宗「読経」
10. ジャワ・ガムラン・ミサ
11. ショパン「葬送行進曲」
12. 臨済宗「読経」
13. グレゴリオ聖歌
14. チベット密教「読経」

15. ゴスペル「山に登りて告げよ」
16. ルネッサンス・アベマリア
17. 浄土宗「読経」
18. 真言宗「声明」
19. モーツァルト「レクイエム」
20. 「聖者が町にやってくる」(1パートの長さ1~2分で以上を繰り返し)(106ペ)

五部構成。ごった煮という感じで、軽い話も重い話も隣り合わせ、長い話と短い話がある。緻密な話とそうでない話がある。…それが人生というものかもしれないと思いつつ読み終えた。

### ◎茂木健一郎著『脳リミットのはずし方』(河出書房新社・2018年) (私物)

最新刊。読みやすい。今年すでに茂木氏の講演を二度聴いて、大いに刺激を受けたので購入。全面的に賛成できるわけではないが、茂木氏の説く「学校教育の限界」については、これからはいつも意識しておく必要があると思っている。近いうちに学校がかつてのソ連のように「内部から再構成される」日が来るかもしれない。

本書の要点は次の二つのチェックリストに集約されていると言ってよい。学校の現状、日本社会の現状とオーバーラップして見える気がする。

#### 「脳リミット診断」(前編)

- 現状維持が何より大事だと思っている
- 一度決めた習慣は変えたくない
- 自分のなかの常識こそが生きる羅針盤である
- 「普通は」「一般的には」という言葉から会話を始めることが多い
- 「どうせ」「でも」「だって」が口癖である
- ムリだと判断したら、あきらめるのが早い
- 新しいことにチャレンジして失敗するのが怖い
- 何をやるにもお金と時間が圧倒的に足りないと思ってしまう
- つい完璧を目指しすぎてしまう
- 変化を楽しむことができず、順応できない (16ペ)

\*

以上の状況の限界を取っ払って、次の状態にすればよいと著者は説く。

#### 「脳リミット診断」(後編)

- 現状維持よりも現状打破する気持ちが湧いてきた
- これまでの自分の価値観を見直すことから始めたい
- 自分の中の限界は自分が勝手に決めたものだと気づいた
- 常識にとらわれないマインドセットができた
- 「できる!」「やれる!」「がんばる!」を口癖にしたい
- アタマで考えるよりもまず行動してみたい気持ちが強くなった
- 失敗を恐れず、勇気を持っていろいろなことにチャレンジしてみたくなった
- 自分磨きにお金や時間を確保したいと考えている
- まずは目の前のことに集中して、ひとつずつ目標をクリアしたい
- 変化を楽しみながら、自分自身の成長をたしかめたい (202 ペ)

\*

要するに、前編のチェックリストの状態を、後編の状態に変えることが、著者の説く「脳リミットを外す」ということなのだ。学校教育を活性化する上で、そのまま適用できる考え方であると思う。ただし、その結果、従来の意味での学校教育が解体されるようなことになるかもしれないのだが…。でも、考えてみれば、用もないのに現状維持していてもしょうもないのも事実だ。もやは、「賃粉切り」も「ラオヤ」もいなくなった。現在の日本では手植えで田植えしている農家がほとんどないことを考えてみてもよい。もちろん、変わらないもの、変えてはならないものがあるのも事実だが、時代というものは変わりゆくものであるのも事実。

#### ◇次回以降の予告

- ◎島地勝彦著『神々にえこひいきされた男たち』（講談社＋α文庫・2017年）（私物）
- ◎左巻健男他著『理科の実験安全マニュアル』（東京書籍・2003年）
- ◎森田敦史著『なにもしていないのに調子がいい』（クロスメディア・パブリッシング・2016年）（私物）
- ◎板倉聖宣著『増補版・模倣と創造』（仮説社・1987年）（私物）
- ◎八代目桂文楽著『芸談あばからべっそん』（ちくま文庫・1992年）（私物）
- ◎マックス・ウェーバー著・中山元訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（日経BPクラシックス・2010年）（私物）
- ◎牧野雅彦著『新書で名著をモノにする「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」』（光文社新書・2011年）（私物）

- ◎廣松渉・加藤尚武編訳『ヘーゲル・セレクション』（平凡社ライブラリー・2017年）（私物）
- ◎西鋭夫著『國破れてマッカーサー』（中公文庫・2005年）（私物）
- ◎文藝別冊『KAWADE 夢ムック・立川談志』（河出書房新社・2013年）（私物）
- ◎立川談志著『努力とは馬鹿に恵えた夢である』（新潮社・2014年）（私物）

#### ◇まとめ・つぶやきなど

新しい環境に馴染みつつある。パソコンが切り替わって少し使いにくいですが、だんだん慣れてきた。徐々にスピードを上げていきたいと思っている。写真は屋代高校図書室に掲げられている川村驥山の書「読書は心眼を開く」。場所を得た、まことに味わい深い書だと思う。真下にこれからたっぷりとお世話になるコピー機。

[4月27日（金）マラソン大会が終わった日。あっという間に時間が過ぎ、ギリギリまで粘って17:00脱稿。これから郵便局に行き、板倉玲子さん、小林光子さんに手紙を出す]

